

1924年 (大正13年) [20歳]

「辰雄日誌1924」No. 4 (4)

—— 1924年4月1日～30日 ——

小池辰雄

○1924年4月1日 (火)

晴。母上と青木へ行つた。お正月以来である。随分久しぶりである。四郎ちゃんと泰ちゃんと三人で植物園へ行ったら、バラックが縦断していてバラック見物の様であつた。その子供等はよきあそび場を得て幸なる哉である。あわれなる彼等も時にはかかるものを与えられて可なりである。しかしそのために植物をいためてはまた困つたことである。帰宅9時半。

○1924年4月2日 (水)

晴後雨。去年の昨日は復活祭であつた。大手町によき午前を送つたことを思い出し、近頃大手町のないことと同時に内村先生のお講演を聴けないのが如何ほど残念かわからない。しかし先生は、こんな不信の徒にきかれたくないのにちがいない。やはり僕がわるいのである。もっと偉く、しつかりした男になつて先生を拝聴しよう。

母上様、少しお不快で誠にお気の毒である。それなのに不心得をして、今日は母上様のお気を波立たせたのは全く悪かった。神様のおゆるしを乞ひ奉りますと同時に明日その償いをして十分お慰め申さねばならない。

午後からはよく雨が降つて就床のときまでやまない。親切な六ちゃんが雨を衝いて来られた。

○1924年4月3日 (木)

曇。神武天皇祭。武田の叔母様、母上へ見舞に来られた。僕は山本へ遊びに行った。義雄さんと隆さんに木工細工の帆船を作つてやった。天候甚だ險悪であつたため、居ること1時間半で辞して来た。省電を市ヶ谷で下りるころは再び霽れて、士官学校で催されている競馬大会を見て帰つた。此処にまた不信の僕は誘惑に打勝たれて、シュークリームとパンとを食べた。ために夕飯にさしつかえた。あわれなる僕はまた悔いたが、それは誠に父のいかり給うところであり、父のかなしみ給う所であつた。自分の近頃を省みて、ただ「ああ」と云うばかりである。神よ、ゆるし給え。



○1924年4月4日(金)

曇。やや寒い。風邪気がなおらない。鼻がつまる。起きたら、中山博一様からの、兄上の原稿と初校の印刷物がドサツと届いた。待ちに待ったものの、喜んで出た。朝食をすませて校正にとりかかった。案外早く出来て嬉しかった。早速、印刷所へ送った。今日は勤んでいた。気候不順なため、母上のお身体も未だはつきりしない。

○1924年4月5日(土)

曇後晴。中山博一様、早朝、原稿御持参で来られたのには驚き且つその御親切に深く感謝した。午前11時から母上をお伴れして赤坂の順天堂別院へ母上の眼を診察に行った。それから大学病院へ母上と僕の鼻を診て戴きに三弦さんの所へ行った。母上の頭痛も性が知れて安心した。

4時半頃、兄上の原稿と印刷物が瀧の川の印刷場からとどいた。校正にとりかかった。晩、青木の叔母様が来られた。校正の如何に面倒なものかを知った。しかしよい経験である。我がために死せる兄上のためと思えば、こんなことは何でもない。身体の具合さえよければ、徹夜してもやりたいのであるが、残念ながら身体が弱い。この弱い身体、一人前に働けぬ身体にしたのは誰の罪か。己れの罪である。何たる罪人ぞ。汝の欲心、貪心は、いざ神の御為に働かんとするときに働けなくする。そのことの何より悲しきこと、今日思つて涙と慙愧に、神前に伏するばかりである。

神よ、鞭を以て、僕の神に立ちかえるまで如何ほどでも打ち給え。この大罪人を。

兄上よ、天に在りて瞰下し給う、わが兄上よ。このなきけなき弟、ああ、もう何も申し上げることが出来ません。ゆるして下さいますか。

4月6日を試み給え。僕を試み給え。明日は如何に戦うかを見給え。父なる神よ。まよえる羊は神の御手によりたのむか否かためし給え。

イザヤ書第30章15節、

「¹⁵主エホバ、イスラエルの聖者かくいいたまえり。なんじら立ちかえりて静かにせば救をえ、平穩にして依頼まば力をうべしと。」

アーメン。午後10時半。

○1924年4月6日(日)

晴後雨。午前10時頃、四郎君が来られた。兄上の原稿初校なる校正の手伝いに。午後3時で終った。それから僕はそれを持って藤井先生のお宅へうかがい、また中山様のお宅も上り、二人で少しやつて、先生の所へ行き、色々と御相談をして、帰宅したのは8時であった。それから1時間、また新しい部分の校正をして寝た。四郎ちゃん、あんまり雨が降ったからお宿り。



○1924年4月7日 (月)

晴。起床9時。午前2時間ほど校正。吉彌さんが礼ちゃんを伴って来られた。突然で驚き且つ嬉しかった。お昼のおすしは美味しかった。午後2時、初校が全部終了、これを瀧の川の印刷所へ届けた。一段落と心もせいせいした。

夕、武田の叔母様の所へお礼に伺った。夜、三弦さんが来られた。水戸へ行く支度をすませてやつと就寝したのは11時半であった。

○1924年4月8日 (火)

晴。起床8時。母上様と朝食を供にした。毎晩の祈祷は10時にすることをお約束した。斎藤様へ一寸、御挨拶に行った。断然たる態度は男らしい (今度の辞職の件に於て)。

午後2時半、帰水。桐寮へ着いて初めて宣ちゃんに会った。汽車は同じであったが会わなかったのである。整頓して、落ちついたのは9時であった。それから1時間、再校をした。まだかなり誤植があるので驚く。11時に就寝。

○1924年4月9日 (水)

晴。春日和。全く新しい気分で登校した。清澄なる大気、生々たる万象、喜々たる小鳥、それは皆、新しき希望に萌えたつて僕を迎え、僕の心の友となってくれた。

授業が始まった。生徒は半数しか居ない。僕は40人中の13番。僕の過去の1年間の成績は誠によくこの番号に表れている。不徹底な勉強ぶりはどうしたつてこれ位の成績しか贏^かち得なかったのである。12人の敵が頭上にあると思つて奮起せざるを得ない。勿論、成績なんかのために勉強する僕ではない。己がベストを尽くして、やるべきことをやれば13番なんかでぶらついている僕ではないのである。この1年には最も独逸語に力を注ぐ。長足の進歩をなして見せる。日々の不断の努力を必要とする。

放課後、村上先生のお宅へ伺った。夕飯は未だ宣ちゃんと二人。外の連中は帰つて来ない。夜、2、3人の友が来た。就床、11時。

なんだかだとごたごたして、本当の生活にもどらない。再校の、水戸へ持参の部分をやり終えた。印刷所から来るのを待っている。

神よ、有難く承ります。神の厳然たる御声を。

「汝、貪る勿れ」

安らか眠らしめ給え。

○1924年4月10日 (木)

晴。

「わが子よ、汝キリスト・イエスにある恩恵によりて強かれ」 (テモテ後



2・1)

主よ、願わくは、僕の生活をもっととSimple〔単純〕になさしめ給え。未だあれこれ
と思ひ煩い、迷う癖ある僕の心を救い給いて、ただ主のことを学び、それに従うことによ
りてのみ、真の平安を得せしめ給え。今日のお試練を有難く受け、感謝致します。

○1924年4月11日 (金)

快晴。朝起きたのは7時。6時半に起きようと思っているが、未だその実行に至らない。
次第にはやめてそれをなさんとする、その努力の愉快さ。

眠い、床にも少し享樂せんと思う。しかし内なる良心は

「おきろ。何でもいいから、おきると定めた以上おきろ、汝は精神に活きるもので
ある」

と云う声を発して僕に促す。僕はそこで内なる霊に醒まされて、はや、肉なる眼は眠くな
くなる。がばつと蒲団をはねのける。朝のお祈りをする。「汝、貪る勿れ」である。カーラ
イルの「汝、盗む勿れ」である。キリスト我が中に在りて、我は強きこと石の如しである。
断然、誘惑を斥ける。

ああ、実によき日であった。天気清朗。キャッチボールもした。自転車にも乗った。次第々々
に我が求むる生活に近づきつつあるを感謝し奉る。ああ主よ、感謝で一杯であります。求
むる生活、希望の生活、そこは主の常に歎び笑つて居られる樂園である。また、主の共に
苦しみ給う感謝なる十字架の許である。今日は感謝のみ。主よ、益々、主の道を教給え。もっ
ともっと深く深く導き給え。

夜、伊藤、相島の二人が遊びに来た。愉快に話して行つた。彼等はよき附属の友である。
彼等の前途のために祈る。うすつぺらならざる人とならんことを祈り奉る。2時間ほど遊
んで帰った。

神よ、僕の祈り奉りたきこと、感謝したきこと許多ございます。この多くをお願いをき
き容れ給い、またこれをしてよき実を結ぶように御力をかし給え。着々とその功を奏せし
め給え。

兄——御許に逝ける——の霊、我が内に深く宿り給え。

兄——今我とこの世につかわされ働ける——の手足となりて我を用い給え。

ああ、主よ！主よ！もつともつと。

計画と決心のみに走り勝ちなる我に、実行とBe〔である、存在〕との御力を与え給え。

「平静にして依頼よりのたのまば力をうべし」

ルーテル。我が友、ルーテルよ。

僕、

「その逞しき筋骨はいずこより？」



机上のルーテルに代りて僕は、

「そは大なる苦しみと忍耐と働きより」

僕、

「その偉大なる頭脳とその敬虔なる信仰とは？」

机上のルーテルに代りて僕は、

「そは、ただ主の道と十字架とより」

と黙せるルーテルは依然として黙せども。感謝、10時の祈祷。

○1924年4月12日(土)

晴。

「人は二人の主に兼ね事^{つか}うることを能わず。汝ら神と富とに事^{つか}うることを能わず。」

主よ、今日の御試み、有難う感謝し奉ります。今晚、人々の来たために、日々の仕事を妨げられたのは遺憾であつた。明日は聖安息日である。

桜が咲きだした。非常に暖かくなってきた。小麦の葉の緑が実に何とも云えない。ことに登校のときには露が光つてついている。

僕はのろい。要領が悪い。もつと要領がいいはずである。頭を鋭くはたらかせなければだめである。やることは沢山ある。寸陰をも惜しんでやる元気と精力がなければ傑物になれぬ。しっかりしろ。である。

○1924年4月13日(日)

終日雨。雨の音を聞いて起き、雨の音を聞きつつ寝る。静かな安息日であつた。恵まれたる安息日であつた。ああ、しかるにも拘らず、汝は罪を犯した。汝の心はその午後3時頃、神をはなれて、遂に私欲にくらんだ。汝はさほど必要でもないのに、少し腹が空いたといつて、間食をなした。しかも過食した。そして夕飯につかえる様なことをした。そして折角、よくならんとしつつある胃の足をとどめた。何たる不心得者ぞ、死ぬ、と神様は怒られたにちがいない。

ああ、神様、ゆるしてください。悔い改めます。ああ、辰雄は下り坂のどん底に達した。これより下れば最早、のぼるべきすべはないのである。汝の精神は汝の身体の如し、である。汝の身体は骨と皮とのみ、その如く汝の精神は神をはなれてさまよえるものである。

Mens sana in corpore sano. 「健全な精神は健全な身体に宿る」

と云うことを知らないか。汝の時計の鎖の端についているメダルに刻まれているこの一句をよく見よ。不健全なる精神は不健全なる身体に宿る、である。それが今の辰雄であるとは。如何になさけないことではないか。ああ、辰雄。しかれども、失望することなかれ。十字架はこの辰雄までも愛して立っている。悔い改めよ、さらば救われん。



「大きい兄さん」——「基督者——はこの辰雄のために逝かれた。悔い改めて、新生涯に入れよ。働け、働け、神のため、キリストのため、あくまでも。」

Fear God and work hard. — David Livingstone

「神を畏れ一生懸命働きなさい。——デイヴィッド・リビングストーン——」

主よ、14日より1週間、20日のイースターまで試み給え。

○1924年4月14日 (月)

曇。起床6時。勉強。主よ、御聖旨は深し。更に更に。

○1924年4月15日 (火)

晴。春風駘蕩、桜花爛漫の時である。夏の上衣を着用し始めた。桜花咲き盛れる小学校と商業学校との傍を過ぎて登校するのは誠に昔を偲ばしむるものである。同心町の家に居たときの桜の花。懐かしき昔よ。また、愛らしき桜花の許に学ぶ愉快さ。

ああ、しかれども、内なる心は如何に。汝、迷える羔よ。頼みまつるべきは、ただ主のみ、主のみ。単純なれ。主のみ！ ただ主のみ。

神よ、ゆるし給え。主よ、一途に僕が身を十字架に。アーメン。

すべてをすてて、迷うことなく、一途に、一途に、十字架に、十字架に。

○1924年4月16日 (水)

曇。1時間目、時間中、腹痛を感じたので帰寮。臥す。昼、絶食。午後、大津校医の診断を受く。腸潰瘍とのこと。夕、絶食。昨日は便に血が少々混じていた。今日は父上の御命日である。

○1924年4月17日 (木)

晴。水高創立記念日。附属の連中、天氣がよいのと桜の見頃なので、友部へ遊びに行った。独り、じーつと病臥していなければならなかった。

神様の御怒を蒙ったのである。「汝貪る勿れ」と言われるのに、僕は貪ったのである。例のカン(緩)なる性質が現われて、自ら禍を招致したのである。神様の宜しと見給わざることをなしたからであること勿論である。故にその御意を知りて僕は謹んで致していなければならなかった。

悔改である。悔改である。然らば救われんである。更に神様に祈った。神様はゆるしてくれると仰った。確かにお父様の御怒は暫時であると確信して感謝であった。御憤怒は暫時にして御恵の生命は永遠に下る。故に感謝であった。

今晚は卵を一つ呑んだきりで、更に食欲がない。



○1924年4月18日(金)

晴。終日病臥す。未だあまり動くことをゆるされない。今日も晩に、おも湯を5勺〔半合、約90ml〕すすったきり、殆ど絶食。そのわりに元氣である。痛みと熱がないのが有難い。じつと静かにねている位、忍ばねばならぬこと。母上様を思ったら何も云えない筈。祈祷の時間はいくらでも与えられている。感謝である。

○1924年4月19日(土)

晴。汝ら悪を^{にく}惡み、善を愛せよ。気分よし。読書する。クロムエルを読んで去年のこの本を読んだ頃の信仰厚かりしを思い、今の薄きを嘆じた。涙であるが、思いかえして見ると、僕はかくして次第に練られて行くのだと分かり、やはり希望の光は明らかなる輝きを示していてくれるのを知った。

○1924年4月20日(日)

晴。Easter「イースター」、キリストの復活。絶好の春日和。麗かな春の陽が^{はなや}緩い光を障子に投げていた。東と南とに面せる室に寝ている僕は障子を開け放って、その心地よき光と東の空と、庭の木蓮や李桃や桜の花をながめて、「復活」の朝を祝した。

藤井先生と母上様へ御音信をさし上げた。去年の復活祭の日を思い出した。大手町! 「うるわしの白百合」の歌を口^{くちずさ}吟んだ。あの午前の2時間! そを目のあたり思い浮かべつつ、寝ながら午前を過ごした。

桐寮連中は大洗へ遊びに出掛けて4時頃、愉快げに帰って来た。御飯もお菓子も美味しそうに食べている。青年の元氣はこの時僕にはなかったが、基督者は歓喜には溢れていた。3、4日不食で漸く^{ようや}消耗の色現われたりといえど、主に在りて心は確かである。

主が「起きよ」と呼び給う日を待つ。遠からずして至ると信ずる。

○1924年4月21日(月)

曇。朝、重湯1杯、卵2個。昼、くず湯1杯、卵2個。晩、粉末ミルク1杯、卵2個。次第に元氣づいて来た。解放に向かいつつある。寝ながら読書する。友達の見舞を受けた。親切な友であった。その友は電報を(そのあとで)持って来てくれた。それは校正の催促であった。瀧の川印刷所からである。「コウセイマダカ ハヤクタノム」と云うのであった。19日には帰京して、届けるつもりであったのが、水曜に病氣にかかったため、残りの部分が出来ず、ついに延ばさざるを得なくなってしまったのである。校正という大切な事を持ちながら、何という不心得をしたものか、悔いても余りあるところである。しかしその中にもなお、御意のあるを知ってやはり、すべては「善」であった。

今日嬉しかったのは、ないないと思っていた印形が今日、偶然見当たったことであった。



旧友に久闊^{きゆうかつ}と云うときの様な感^{かん}がして、印をとりあげて満面、安堵と歓喜に充ちた。その印形というのは、亡き兄上のであつて、それを僕が戴いて、僕の名をほりかえしたのである。兄上の跡を必ず確く継ぐべき僕はこの印を粗末に出来ない。

○1924年4月22日 (火)

晴。兄上御許へ召されし日。

「我^{われ}かれらの反逆^{そむぎ}を医^いし、悦^{えき}びて之を愛せん。我が怒は彼を離れ去りたり」(ホセア14・4)

今朝、アヌソール座薬〔痔の薬〕によつて便が多量に排出された。検便の結果「よし」とのこと。僕の病氣も癒しの兆し顕然で本当に有難くあつた。床の上におき上つた。室内も歩き廻つてみた。

○1924年4月23日 (水)

晴。昨夜、雨降り、今朝は霽れていた。母上様に御音信した。ぶらぶらとポストまで自分で出しに行つてきた。足に力のない人には流石に驚いた。また、骨皮の身体になつてしまつた。くだらぬ友達が夜遅くまでだべつて行つたのには癪に障つた。友達は多く僕の友達でない。桐寮の外の連中へのである。今晚の如きは中学時代の同級だつた奴であるが。校正に着手した。明日で出来上がりそうである。お粥に近づいてきた。

○1924年4月24日 (木)

晴。今日は病床を離れた。感謝のみであつた。1週間忍んだ。神、御父なる神様は「起きよ」と云われた。母上様から感謝なる御手紙が来た。涙ながらに読んだ。母上様のために、辰雄は起たねばならぬ。兄上様のために、辰雄をしつかり歩まねばならぬ。すべて主なる神のために、辰雄は十字架を負わねばならぬ。栄光神に在れ。

昨夜の夢の不思議なることよ。蛇、悪^{にく}むべき蛇が現われた。その蛇は僕に向かつて来た。追つて来た。僕は遂にその捕えるところとなり、巻きつかれて喰^はまれた。僕は死んだ。

「ああ、今死ぬのですか、今死なねばならないのですかと僕は問うた。すると、蛇は答えた。

「いや、今は仮りに死ぬのだ。4月20日に新しく生まれるのだ」

と云つて、蛇はボールドに白き太き文字を以て、4.20と大書して示してくれた。そこで僕はほつと安心した。そんならいくらでも喰^はめと云つて、彼の噛みつくに任せた。そのあとはどうなったか憶えていない。起きてみて思つてみると、4.20は正に主イエス・キリストの復活祭当日であるのに気がつき、我ながら事^{こと}の不思議なるに驚き、且つ言うべからざる靈感に打たれた。そしてまた、母上様から、この感謝なる御手紙を戴いたに至つては、事の偶



然ならざるを^{おも}惟い、深く深くお祈りするのである。

御神よ、潔め給え。聖霊、導き給え。アーメン。 Mens sana in corpore sano.

○1924年4月25日 (金)

曇、烈風。終日、寮に静かにしていた。東京の母上、武田の叔母上、大層御心配になり、三弦さんを迎えに遣^よこして下さるとの御葉書、驚き早速電報で、

「アスカエル クルニオヨバズ」

とお断りをした。静かに土曜帰ることの出来る様、自重して寝ていた。夜は、非常な暴風雨であつた。

○1924年4月26日 (土)

晴。天、幸し給う。風雨一過して空は霽れた。僕は静かに感謝の祈りを上げた。10時13分発の列車で立つべく、9時に人力車に来て貰った。宣ちゃんも帰ると云うので、万一のために有難い友であつた。車屋は68才の老人であるが、^{かくしゃく}豊饒たるものである。20年来、病氣したことがないと云う。腎臓病をわずらつたそうである。達者で働けるのが何よりだと云つて、自己の天職に安んじて車をひいている彼に感心した。車上の高等学校生は正に彼の弟子となつてその心に尊敬しなければならなかつた。彼の養生法を問えば、彼は云う、「野菜食」と。芋、大根、人参の類の汁、これにかぎると云う。人は、天然に親しみ、野菜と水に養われて最も健全である。車中、何ともなかつた。昼は、持参の卵とパンと林檎で軽くすませた。晩は、野菜スープ！ 母上が作つて置いて下さつた。実に実に美味しかった。母上様は大変な御心配であつたが、僕の元氣なのを見て、嬉し驚きに喜んで居られた。「腸潰瘍」とか云うのは医師の誤診と云つてよいのである。出血は痔のためである。とにかく、病に罹^もつた原なる僕が悪かつたのは勿論であるが、大袈裟な名を付した医者にも少々責任あるものの如しである。夜、三弦さんが来られて、「そんなことだろうと思つていた」と云われた。武田の叔母様、母上様に1週間も御心配をかけたのは悪かつた。何より悪かつたのは、自分の罪を犯したことである。「汝貪る勿れ」を犯したからである。

しかし、深く考えて、すべてはありがたく終る。基督者となつて、ついに失望に終ることはない。実に感謝なる生涯はクリスチャンライフである。就床10時、祈祷。

○1924年4月27日 (日)

晴。神よ。我が魂を。我が身は如何に痩せ衰うるとも我が魂を生かし給え。然らば我はついに死することなし。我がこの世にあらん限りは我が肉体も生くべし。先ず魂を生かし給え。醒まし給え。導き給え。我が迷いのどん底に沈^{しず}淪めり。迷える小羊。

主は近し。救は近し。汝、最も迷える者よ。汝、汝のどん底に沈める今、救は最も近し。



ただ主を仰ぎ瞻、主に頼り奉れよ。さらば救われん。

実さんが初めて背広で来られた。5月1日から大蔵省御出勤である。四郎ちゃんも5月1日から大学である。僕も帰らんである。「崖下の羊を助けようとする牧者の画のスケッチあり」

○1924年4月28日 (月)

晴。起床7時半。10時、家を出て藤井先生の御宅へ参上。校正したのを持って。畠の緑、チューリップの花園、躑躅の赤や白。ドーダンの緑と白い提灯の花。春の野趣の如何に麗しきことよ。先生のお家で御相談をすること1時間位。出版の万事をおたのみして帰る。先生の御親切には只々感謝あるのみ。

帰途、理髪屋に入った。病人気に顔、頭を一掃して玉川河原へ出た。蓮華の花の赤毛毯は実に奇麗だった。昔、遠足に行つたときのことを思い出し、暫し独りで感慨無量、花の上に仰臥すること多時。花と語ること親し。川風に吹かれつつ、軽く昼食をとる。

帰途、思いついて武田へ寄り、叔父叔母様に御目に懸かり、この度の御心配をおかけしたことに對し、また病氣を得たことに對し、お詫びをする。叔母様は今日午前に見舞に来て下さつたとのこと。誠に誠にその御心には涙を以て感謝するのみ。蓮華の花を差し上げる。武田から歩いて帰る。

入浴した。丁度10貫〔37.5kg〕。夕飯の美味しかったこと。半日の清遊、大いに身体に益し、回復の速やかなこと疑いなしである。ただ、我が内なる心霊のしつかりすることのみが最も大切なことであり、且つ我がなすべきことの全部である。心がしつかりして外が整つてこない道理はないのである。

内に声あり。「ざたんよ退け」。かくて誘惑も何者ぞ。

主、基督の如く、正に「サタンよ退け」と云いて。

主よ、我は主の枝なり。我戦いに勝たん。よき一日。

○1924年4月29日 (火)

晴。主よ、願わくば10日の間、我を験^{ため}せよ。主よ、明日より10日の間、我黙して筆をも執らじ。ただ主に従いて歩み、信仰のよき戦を戦いて、主の御心を成就せしめん。

ああ、10日間の我が言行如何によりて我が興^{おこ}らんか死せんかは定まるべし。

ああ、重大なる10日間よ。謹み深く、思慮深く、信仰堅く歩ましめ給え。アーメン。

○1924年4月30日 (水) ～5月12日 (月)

〔記載なし〕

